論の運びなど、最早や批評の限りではない。一例を擧ぐれば池田學士が宋に至つて江南の水學が俄然興起するが、その機運が、熙寧の新政によつて促成されたと主張したのに博士が裏打ちをされて、「然しそれと共に自然に溫釀されたる社會的狀勢が其の背後の基礎的條件として嚴存して居る」事を强調された點（要略第一章）等實に心憎いものがある。また「宋代に起つた水利學が元明に繼承され、學は實行に遷され、實行上の結果が學說を訂正しつゝ」、江南開發の機運、從つて長江下流域の人文を進めた事實を論述されたるが如き（要略第三章）茲に「江南開發史」の總決算と全貌とが鮮やかに示され、池田氏の難解なる諸論文が一氣に解決された感がする。

本書に對する註文としては全體として內容をもう少し安易に說いて貰ひたかつたこと、地圖や略圖をもつと挿入して讀み易くしてほしかつたと思ふ。でないと學術專門の論文集と言つた感が深い。

揚子江下流域の地勢の上に、重大なる作用と牽制力とをもつ松江と太湖、そしてデルタ、そのデルタの上に發生すべき生產力が、歷史上、宋代より最も活潑に躍動を開始したとすることは何人もが異存なからう。嘗つて故桑原博士が〃晉室の南渡と南方の開發〃（大正二年）〃歷史上より觀たる南支那の開發〃（大正八年）等の一世の名論文を發表され、晉の南遷によつて北支那の文化が長江流域に移動され、扶植された事を論證されたが、その桑原博士の門下出身たる岡崎博士が近世における江南の開發を研究され、その年來の勞作を今茲に發表されると言ふ事は奇しき因緣でなくて何であらう。（昭和十五年、弘文堂、三圓八〇錢）〔荒木敏一〕

開封と杭州

支那歷史地理叢書第七

會我部靜雄著

開封と杭州とが支那歷史上特に有名となつたのは宋時代からであつて、それは之等兩都市が宋の首都となつたが爲である。宋はかの靖康の難を境にして北宋、南宋に區別されるが、開封、杭州は夫々北宋、南宋の首都として前古未曾有の繁榮を呈した。本書は主として當時の開封、杭州の有樣を敍し、兼ねて之等兩都市が今日に至る迄如何なる變遷を遂げて來たかを述べたものである。

本書は全體を開封と杭州との二部に分ち、更にその各々を幾つかの節に分けて說いてゐる。以下本文に從つて開封、杭州の順にその內容を簡單に紹介する事とする。

〔開封〕一は「開封の概觀」である。こゝでは主として開封の地形と沿革とを述べ、特にこの地が宋の首都に選められるに至つた事情を縷說してゐる。周から唐迄の支那歷代の首都は概ね函谷關を中心として、西、長安附近か、東、洛陽附近かに決つてゐた。之は地勢の堅固なるに據つたのであるが、この開封の地は平原に位し、水陸交通至便の所である。宋がかゝる所に都を選めたのは時勢の變轉に基づくもので、近代的首都が地勢の堅固なるよりも交通の至便なるをよりよく要求したが爲で、尙開封が宋の首都に適

する重要な理由として宋の中央集權と之が背景をなす多數の禁軍養成に好都合な點をあげてゐる。併し根本的には唐中葉以後に於ける府兵制度の崩壞と傭兵制度採用の必然的結果たる國費の膨脹がかくの如き交通便利にして食糧物資の集中に惠まれたる地を首都として要求した事は言ふ迄もあるまい。二は「開封と四河渠」でこゝでは四河渠卽ち黃河、汴河、蔡河、五丈河が夫々宋の首都開封と外部との交通の幹線をなし開封への食糧物資の輸送路をなしてゐた事、就中汴河は豐沃なる江浙地方からの米穀輸送路として文字通り開封にとり生命線であつた事を說いてゐる。「三」からは愈々北宋時代の開封の描寫に入り、先づ「三」では「宋代開封の都市區劃」を述べ、次いで四「宋代開封の料理屋」五「宋代開封の一日」六「宋代開封の風俗と演藝」と城內の盛んなる商業、歡樂地帶の有樣、士庶の豪華なる消費興樂生活の模樣を敍し、「七」「八」「九」「十」で北宋時代の開封の年中行事を春夏秋冬に分つて述べてゐる。之等は主として東京夢華錄によつて書かれてゐる故、右は宋代でも最も華やかな徽宗時代の情景を傳へたものである。然るにかゝる開封の繁華も金軍の侵入、宋の南渡と共に一朝にして失はれる事となつた。卽ち「十一」「金時代及びそれ以後の開封」「十二」「黃河の氾濫と今日と開封」ではそれ以後今日に至る迄の寂れたる開封の變遷を述べたものである。尙最後の「十三」「開封の古蹟」は舊蹟を通して再び往時の開封を偲ばしめんとしたのであらう。

〔杭州〕杭州の部分も大體開封と同樣の順序によつて述べられてゐる。卽ち「一」「杭州の概觀」では地形、沿革南宋の首都となりし次第が說かれ、「二」「南宋時代杭州の都市區劃」三「南宋時代杭州街市の情景」四「南宋時代杭州の料理屋」五「南宋時代杭州の風俗と演藝」六「南宋時代杭州の四季の行事」で開封と同樣當時の杭州城內の有樣や人々の生活が述べられてゐる。南宋の朝廷は杭州が行在所であると言ふ意識が去らぬ爲か諸殿閣等は必要に應じて建造し、之等は開封に比べると頗る質素であつたが城內の繁盛は開封に遜色なく就中瓦子勾欄の盛んなるは開封以上であつたといふ。「七」は「元時代及びそれ以後の杭州」最後の八は「杭州の名勝と舊蹟」であるが「八」では特に明媚なる西湖の風景と之を中心とした古蹟傳說を記し杭州の遺蹟が開封のそれに比し割合によく保存されてゐるのは黃河の如き自然的威力が加はらなかつた事と共にこの天下の絕景西湖を有して世人の注意が離れなかつた爲と述べてゐる。

以上は全く簡單な內容の紹介に終つたが、本書の主要部分をなす(宋代の)首都としての開封、杭州の敍述が大體に於て或る時期の見聞錄に基づく、城內の表面的風景描寫に終始し、時代の推移に伴ふ變化と言つた方面や外部との交通經濟關係が餘り述べられてゐないのは物足りない。尙海港としての杭州に就いても一言觸れて欲しかつた。併し兎に角宋代研究者として令名高き曾我部氏の作になり且つ信用すべき記錄に基づいて忠實に書かれてゐるからその限り充分信賴し得るものと思はれる。就中年月行事や古蹟に關聯して種々の傳說、物語が記されてゐるのは讀者の興味を惹くであらう。支那歷史、地理の研究者のみならず一般支那に關心

を有する土の一讀をお奬めする。（四六版、本文一五六、附錄三頁圖版四、地圖二、昭和十五年七月、富山房發行、一圓二十錢）

〔藤原利一郎〕

奉天と遼陽

支那歷史地理叢書第六

鴛淵一著

人間の一生に盛衰のある如く民族や國家と云ふものにも盛衰は考へられる。と同時にその民族や國家の中心となつた都市そのものにも盛衰は比例してあつたが如くである。支那に於ては四千年の歷史に於て多くの都市の興廢が見られる。其等は其等を中心とした國家の盛衰と運命を共にして居る。過去のものである都市は支那には多い。幸ひな事には支那における其等の都市は、たとひ次の時代の國家や民族が其の都市を「場所」として取りあげないことはあつてもやはり支那的文化の雰圍氣の中に存せしめられたのであり、自然と其等が延長されて今日我々が各地に見る如き樣態で殘されて居るのである。今日の情勢から直には過去の繁榮は構成出來ないにしても、當時の多大の文獻はそれを證明して居り、殊にその都市の繁榮の記述を目的とした文獻はありし日の都市の活氣ある狀態を充分髣髴せしめて居る。それを思ふと、此處にとり上げる奉天と遼陽は共に過去に於て滿洲系の民族或は國家と云つたものの中心であつた事は明かな事としても、それは餘りにも一時的な且は斷代的なものであつたと云はざるを得ない。そのヒンターランドは年代的には著者の云はれる如く滿蒙族漢民族の支配が半々であつたにせよ、歷史の示す所は奉天遼陽共に支那の植民的軍事的都市として長く近代までその支配が續けられ、滿蒙族の支配の時もやはりこの支那の特色付けた都市の性格をそのまゝうけついで居る場合が多いのである。奉天と遼陽が眞に滿洲の中心となつたのは清朝の初期の若干期間に過ぎない。當時の滿洲族が如何なる文化程度であつたか、又は都市文化を構成する如何ほど能力をもつて居たかはこゝに述べるまでもない。後代乾隆帝をはじめ清朝の學者には滿洲族の出自の尊嚴を誇る爲に樣々なる作爲を敢てして居るが、例を奉天故宮に見る如く反て不調和な事物の羅列となり、初期の貧弱さが目立つやうな有樣になつて居る。文獻に於ても「陪京雜述記」とか「欽定滿洲源流考」等奉天或は滿洲と云つたものを知るのに便利ではあるが尙此等の虛飾が、史料としての使用に際し吾人をして困惑せしめる事が多い。奉天とか遼陽の研究には支那の都市の研究と比するとずつと困難が加はつてくるのである。今回出刊せられた鴛淵氏の「奉天と遼陽」は、かやうな困難さを克服した近來稀に見る行き方をとつた書である。內容は書名の如く奉天と遼陽に二大別し、奉天に於ては第一、奉天史話として沿革地理的な奉天の發達を述べ、第二、奉天城談議では都城としての奉天を考へ、第三、奉天遺光では現存の附近の遺跡に就いて種々語られて居る。遼陽の部も略々同樣の行き方で、一讀、兩市の歷史的な理解を得るに適宜な方法がとられて居るわけである。後學者として一々批判の限ではないが若干氣付いた點